

令和 6 年 5 月 20 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2023

課題番号：16K03583

研究課題名（和文）貨幣と国家に関する理論的および学説史的研究

研究課題名（英文）Theoretical and historical studies on money and the state

研究代表者

大友 敏明 (Toshiaki, Otomo)

立教大学・経済学部・特定課題研究員

研究者番号：90194224

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は貨幣と国家との関係を考察した。第1は中央銀行の独立性の問題である。1797年のイングランド銀行の兌換停止後に起きた物価騰貴は政府のイングランド銀行からの多額の借り入れが原因であるという批判があった。しかしH.ソーントン、イングランド銀行は政府から独立しているという金融独立説を説いた。第2はJ.ステュアートの計算貨幣論である。鑄貨は金銀比価や摩耗により度量標準を果たせない。そのため鑄貨から商品性を取り除いた銀行貨幣がその機能を果たす。第3はG.F.クナップの貨幣国定説を批判した福田徳三の貨幣論である。福田は法貨規定よりも税の支払手段としての貨幣を重視し国家による受領性を強調した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は（1）中央銀行の独立性という問題を19世紀前半の地金論争期における地金派と反地金派との論争のなかに見だし、金融従属説と金融独立説という観点からとらえ直したことである。（2）J.ステュアートの計算貨幣論をアムステルダム銀行の銀行貨幣との関連において考察したことである。（3）福田徳三の流通の理論の形成過程を明らかにし、交換と分配の理論や貨幣の理論、余剰の概念を示した。そのうえで単線の生産構造とそれにもとづく貯蓄と消費の理論を考察したことである。

研究成果の概要（英文）：This study considered the relationship between money and the state. The first is that I examined the Bank of England's independence. The increase in prices after the suspension of cash payments by the Bank of England in 1797 was caused by the government's large quantity of borrowing from the Bank. However, H. Thornton asserted the theory of financial independence to criticize the theory of financial dependence. The second is J. Stuart's theory of money of account. Coins cannot be accomplished the standard of price for their exchange rate of gold to silver and wear. Therefore, paper money, Bank notes and bank money taken from a commodity can be achieved its function. The third is that I studied Tokuzo Fukuda's theory of money that had criticized G. F. Knapp's state theory of money. He argued money as a means to pay the tax more than the legal tender and emphasized the acceptance by means of the state.

研究分野：経済学史

キーワード：中央銀行の独立性 中央銀行 地金論争 貨幣政策 計算貨幣 福田徳三

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初は、『信用理論史』(慶應義塾大学出版会、2001年)に続く貨幣信用論に関する著書『貨幣と国家』の刊行を目指していた。前著は、信用と再生産の関係を中心として重商主義期から古典派経済学までを取り上げた。経済循環の構造や信用創造、恐慌論が主たるテーマであった。その後、研究過程で抱いた通貨学派と銀行学派とは異なる第3の学派たる H.パ-ネルや J.W.ギルバートらのフリーバンキング学派の研究を行い、この学派の発生と消滅の過程を研究した。また Monied Capital の蓄積に関する研究を行い、T.トゥックと匿名氏の貨幣信用論の研究を行った。こうした研究を踏まえ、貨幣信用制度に国家の観点を導入し、中央銀行と政府との関係や不換銀行券の性格、金融危機における国家信用の内実を明らかにすることが研究の動機であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、貨幣信用制度に国家の観点を導入し、貨幣信用制度と国家とがいかなる関係にあるのかを理論的および学説史的に研究することである。H.ソートンによる中央銀行の独立性の問題や J.ステュアートの計算貨幣と信用論との関係、福田徳三の流通の理論を研究することを課題とした。

3. 研究の方法

本研究課題の研究方法は、国内外の資料を解読することである。そのために国内外での資料の収集を行った。夏季休暇にはケンブリッジ大学で資料収集を行った。

4. 研究成果

(1) H.ソートンとイングランド銀行の独立性に関する研究は、イングランド銀行の独立性の根拠を明らかにした。イギリスでは 1797 年のイングランド銀行の兌換停止後に物価騰貴と為替相場下落が起きた。D.リカードウを代表とする地金派はその原因をイングランド銀行の政府への多額の貸付であるとみなした。これに対して、反地金派の F.ベアリングやソートンは金融独立説を主張し反論した。ソートンによれば、イングランド銀行は政府から独立しているので、政府貸付が増えても、やがて返済される。したがって、物価騰貴の原因は政府貸付以外にあるとし、穀物不足が原因であると論じた。ソートンの言う金融独立説は 2 つの根拠からなる。それは制度としての独立性と手段としての独立性である。制度としての独立性には次の 3 つの根拠がある。第 1 にイングランド銀行と政府との関係は通常の債権債務関係である。政府が戦争資金を同行から調達したとしても、期限が来たら返済の義務を負う。第 2 に政府は同行からの借入金の返済のために減債基金制度を整備し、国債の返済に備えている。第 3 に銀行券の数の公表である。イングランド銀行は貸借対照表を議会で公開し、銀行券の発行量を国民に知らしめる義務がある。この制度としての独立性の意義は、イングランド銀行が政府に従属しているという議会内外の批判に対して、同行ばかりでなく政府も金融の論理にしたがって行動していたことを明らかにしていることにある。イングランド銀行の政府への貸付がいかに巨額でも、貸し手である銀行は金準備の増減に依存するのではなく、借り手の将来の返済の確実度をみながら貸し付けていた。イングランド銀行理事たちは首相に返済計画の要求もした。他方借り手である政府の側でも減債基金制度の整備を行い、国債の信用、ひいては政府の信用を担保することを最優先の課題とした。こうした制度としての独立性に加えて、ソートンはイングランド銀行の貨幣政策に言及した。イギリスには高利禁止法があるので、利子率政策を使うことはできない。その代わ

りに、イングランド銀行は裁量的な貨幣政策を使って銀行券の発行量を調整する。同行は週ごとに民間への貸付と政府への貸付との割合を調整する。これは裁量的な貨幣政策ともいうべきもので、イングランド銀行は金準備の増減によって貸付を調整するのではなく、地金の市場価格と鑄造価格をみながら発行量を調整していた。

(2) J. スチュアートの計算貨幣論に関する研究は、商品貨幣説を批判する貨幣名目説の論拠を明らかにした。K. マルクスは、スチュアートの計算貨幣論を貨幣の観念的度量単位説と批判した。しかし計算貨幣自体は実体概念を否定するものではない。計算貨幣という概念は、フィートなどの長さの単位と同じように、貨幣単位にも実体がある。実体の上に貨幣呼称を付けるのが計算貨幣である。しかし、鑄貨の場合には、金属の一定分量に名称を付けるので、計算単位を商品に永続的に固定することができない。鑄貨は金銀比価や摩損などの理由から商品価値を測る尺度としては不適合だからである。これをスチュアートは「貨幣と鑄貨」の矛盾と呼ぶ。この矛盾を解決するために、貨幣単位から金属という商品性(実体)を切り離し、実体をもたない紙幣や銀行貨幣を主張した。スチュアートは計算貨幣の実例としてアムステルダム銀行の銀行貨幣の有効性をその論拠として示した。この銀行貨幣は預金者が鑄貨を預金すれば、預金額は銀行の帳簿に記載される。預金された鑄貨は銀行の金庫に閉蔵され、流通過程には出てこない。銀行は兌換もせず、銀行の帳簿上だけで振替相殺する。こうすれば価格の度量標準は鑄貨の摩損には影響されない。計算貨幣は鑄貨の欠点を除去し銀行貨幣を貨幣とするために必要な概念であった。

(3) 福田徳三による流通の理論の形成過程は3つの時期に分かれる。第1期は1907年から1915年にかけて『経済学講義』を執筆した時期である。第2期は『流通経済講話』の時期である。第3期は1930年刊行の『厚生経済研究』を執筆した時期である。福田の流通の理論は交換と分配の理論、貨幣の理論、余剰の概念からなる。の交換と分配の理論は、重農学派のF. ケネーの『経済表』の分析である。福田によるケネー研究の特徴は、経済社会の均衡状態や不均衡状態の分析のみならず、生産と消費との関係、なかんずく消費に力点を置いた研究にある。重商主義者は国内で生産した財を外国で売るように生産と消費との関係を分離してとらえたのに対して、福田は『経済表』が生産と消費との関係を一国内における社会的総生産物の交換と分配においてとらえている点を強調した。の貨幣の理論に関して言えば、福田は貨幣名目説の観点からG.F. クナップの貨幣国定説を批判した。福田の貨幣論は、岡橋保が命名したように贖罪起源説である。この説は、貨幣の起源は売買・交換に先立つと考え、貨幣は神祇や君主への犠牲や奉幣、上納金であるという考えである。この説は、A. スミスやマルクス、C. メンガーなどが主張した貨幣は商品交換から生まれるという見解とは異なる。福田は、商品貨幣説あるいは金属学説を批判することを意図し、貨幣名目説に立ちながら、クナップの貨幣国定説を批判した。批判の要点は、国家が法律によって貨幣を発行することではなく、国家が国民の納税する貨幣をつねに受け入れることにある。福田は国家による租税徴発を神祇や君主への奉幣や上納金の延長上に位置づけ、国家が税の支払手段として貨幣を必ず受け取れることを貨幣の流通根拠とした。これに対して、クナップは貨幣を法秩序の創出物であると説き、法貨規定を貨幣の流通根拠とした。福田は法貨規定よりも、国家による貨幣の受領性を重視したのである。の余剰の概念に関して言えば、A. マーシャルの消費者余剰の理論の一部を批判しながらも継承した。そのうえでJ.A. ホブソンの単線的生産構造と貯蓄と消費の理論を自身の理論の中心に置いた。これを基礎にして、福田は社会的に必要な貯蓄と社会的に必要な消費との間における均衡と不均衡という概念を導入し、資本主義社会における動態論を展開した。そして不均衡を是正するために福田は共産原則を提唱し、国家や自治体などの公共部門が租税として徴発した余剰を「各人の需要に応じて」社会の構成員に分配する原則を示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大友 敏明	4. 巻 89巻3号
2. 論文標題 ヘンリー・ソートンとイングランド銀行の独立性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 経済志林	6. 最初と最後の頁 77-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大友敏明
2. 発表標題 ヘンリー・ソートンとイングランド銀行の独立性
3. 学会等名 ケインズ学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>書評</p> <p>(1) 大谷禎之介著『マルクスの利子生み資本論』全4巻、桜井書店、2016年。『大原社会問題研究所雑誌』703、2017年5月。</p> <p>(2) SGCIME（マルクス経済学の現代的課題研究会）編『マルクス経済学 市場理論の構造と転回』桜井書店、2021年。『経済学史研究』65巻1号、2023年7月。</p> <p>(3) 楊枝嗣朗著『貨幣と国家 資本主義的信用貨幣制度の生成と展開』文眞堂、2022年。『季刊経済理論』60巻3号、2023年10月。</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------